

RA研究会セッション

「研究支援学」は可能か

(パネリスト)

澤田芳郎・馬場大輔・原田隆・山田光利

趣旨

およそ現象が存在するところ、それは研究の対象になる。我々URAが従事する研究支援も例外ではないが、それが「学」を名乗るには意見交換しようとする複数の人間が必要であり、おそらくは職務の一部としても認められなければならない。すると問われるのは学としての存在意義である。

本セッションでは趣旨説明に続き、各パネリストから各自のテーマに関するプレゼンを得たうえ、研究支援学の領域やアプローチを検討して、この問題を考える。研究支援学がURAの認識や行動をどう支えるかも深めたい。

● プレゼンテーション

- ・ 産学連携の分化とコーディネータ(澤田芳郎＝司会)
- ・ 研究マネジメントについて(馬場大輔＝司会)
- ・ URAの責任と職業倫理(原田隆)
- ・ 研究機能が分散する社会を想う(山田光利)

● ディスカッション

- ・ セッションのテーマは「研究支援学の学としての存在意義」だが、抽象的に考えるだけが検討方法ではない。
- ・ むしろ各自のテーマを掘り下げ、フロアとの、あるいはパネリスト相互のディスカッションを通して何か見えてくるよう努めたい。「意見交換」を先行させることで、研究支援学をシミュレートする。

研究機能が分散する 社会を想う

Smips (知的財産マネジメント研究会)

研究現場の知財分科会オーガナイザー

山田 光利

自己紹介

- ・ 筑波大学 第三学群 工学システム学類 卒業
- ・ 工場用ロボットメーカーでエンジニア→知財部
- ・ 研究者向けイベントスペース 「博士のシェアハウス」
- ・ **アカデミアの未来を妄想する研究会**

研究会の紹介

- ・ 研究界隈で起こっている先進的な取り組みを紹介
- ・ 先進的 = 5年後に普通になってそう
- ・ 普通 = 多くの人に選択肢の1つとして認識されている

取り上げてきたテーマ

- ・ 研究開発特化型クラウドソーシング「ResQue」
- ・ 研究機関に属さずに「独立系研究者」として生きる
- ・ 博士課程への進学ではなくNPOを作って研究する
- ・ (来月開催) 学術系クラウドファンディングの是非
- ・ 学術系のテーマを扱った同人イベントの可能性について

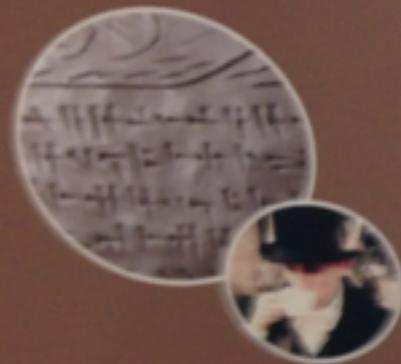
などなど・・・

事例紹介

博物ふえすていばる！

- ・ 2014年8月9,10日@科学技術館
- ・ 主催は博物系Tシャツブランドのパイライトスマイル
- ・ 「博物館に展示されてそうなもの」をモチーフに作られた作品の展示即売会
- ・ 作品に込められた「学術的な知見」を合わせて紹介する
- ・ 生物系作品に特化した「なまけっと」なども開催実績があり、歴史など他分野にも展開可能と思われる

空想神話屋 枇々木 聖



！ 粘土板は、すごい。

- 古代世界では数少ない、安価な筆記具
必要なものは、粘土と筆の筆だけ。インクも不要なので書き放題。
数億年から多くの人々が利用することができ、又かや自然の災害への強がられます。
- 書き直しも簡単、高速な筆記もできる
失敗しても修正ができるため、資料を無駄にすることがありません。
筆は高速な筆記もできるので安価だけでなく、速くも楽な筆記も可能。
- 焼けて固まれば、千年単位で保存できる
乾燥で使えただけでなく、保存性も抜群。気候に依存する必要がある場合、
粘土を焼くことで資料がよけに千年単位の保存が可能です。

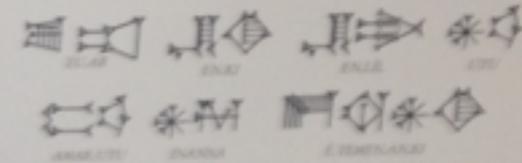
！ 粘土板は、たのしい。

- 簡単な道具で実際に書ける
専用のペンや筆と粘土板があれば、誰でも簡単に文字を書ける。
ペンや筆は、専用の道具や、身近なものでも代用可能。また、粘土板は、専用の道具や、身近なものでも代用可能。
- 文字、芸術や古代世界など色々な分野に応がる
文字だけでなく、芸術や古代世界など色々な分野に応がる。
文字だけでなく、芸術や古代世界など色々な分野に応がる。

? いろいろな楔形文字

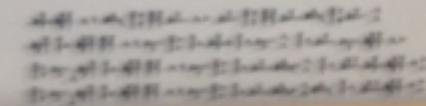
私達の世界の楔形文字

楔形文字はおよそ5000年前ほど西のメソポタミア文明で使われていました。初期に書かれたシュメール、その後発展したバビロニアのアカド語、さらにエジプト語とレイトのものもあります。ひとことで楔形文字といっても様々な言葉があるのです。発明された当初は漢字のような表音文字で、後にカタカナのような表音文字に発展していった。実際に書かれた文字も多く、粘土板に書かれたものから発掘されたものまで見られるものがあります。



空想の世界の楔形文字

これは空想世界の楔形文字です。空想世界の楔形文字として、空想の世界に書かれた文字です。空想世界の楔形文字として、空想の世界に書かれた文字です。空想世界の楔形文字として、空想の世界に書かれた文字です。



「空想神話屋」で検索すると
いろいろ出てきます



学術系イベントの集客

- ・ サイエンスアゴラ(2012) → 4,012人 ※2日の合計
- ・ 京大アカデミックデイ(2013) → 529人 ※1日
- ・ 博物ふえす(2014) → 3,814人 ※2日の合計

開催するにあたって

- ・ ○○分野の研究者にも関わって欲しい
- ・ ○○って展示してもいいの？

こういった課題を相談できる存在になれば、
研究を広報する上での良いパートナーになるのでは？

(参考) ゲーム業界の話

- ・ ゲームをプレーしている様子をニコニコ動画やYouTubeにアップする「ゲーム実況（ゲームプレー動画）」
- ・ 当初はネタバレや著作権の問題でメーカーは敵対視
- ・ 今やゲーム実況が「東京ゲームショーの公式企画」になったり、プレー動画の配信機能が「プレイステーション4の公式機能」になったりしている
- ・ やっていいこと・悪いことの線引きの主導権を握った上で巻き込む（仲間に引き込む）

知財部時代の経験より

- ・ 自分の役目は何かを決めることではない。**決定者が必要な情報を添えて、選択肢を提示することだ。**
- ・ (研究費獲得、研究戦略などの話を聞く限り)、**研究支援も同じではないか。選ぶのは研究者**
- ・ 判断を研究者に委ねるならば、ある程度**客観的に情報提供が出来る状態であるべき** (学問化の必要性)

まとめ

- ・ **大学の外で研究に関する多様な動きが始まった**
- ・ **研究支援のあり方として、それらの動きを積極的に巻き込んでいくべきではないか**
- ・ **選択肢の1つとして冷静に見るためには、共通の視点が必要であり、学問化を目指す意味はある**

と言いつつ、最後に

- ・ 大学の外で始まっている動きも「研究支援学」の対象として、各大学のURAで協力しながら議論を進めてもらいたい

その一方で、

- ・ (皆で協力等と甘っちょろいことを言っていないで) **どこの大学が他の大学を出し抜いてこういった動きを巻き込んでいくのか興味がある**

興味ある人ご連絡ください

- ・ **facebook「山田光利」** でやってるのでメッセください。（どこで会ったか分かる内容を添えて）
- ・ **twitter「2ndlab」** でやってるので@飛ばしてください。日々の情報発信はほぼこちら。
- ・ **ウェブサイト「学問の箱庭」** に日々の活動をまとめています。これまでの研究会のまとめ等はこちら。

2014. 9.18

第4回URAシンポジウム／第6回RA研究会

産学連携の分化とコーディネータ

小樽商科大学ビジネス創造センター
澤田芳郎

職 歴

● シンクタンク研究員

- センチュリリサーチセンタ株式会社(1982～85)
- 財団法人未来工学研究所(1985～88)

● 大学教員【科学社会学、情報システム論】

- 京都大学教育学部(1988～90、任期付き)
- 愛知教育大学教育学部(1990～2001)

● 大学教員【共同研究センター専任教員】

- 京都大学国際融合創造センター／産官学連携センター(2001～2010)
- 小樽商科大学ビジネス創造センター(2010～)

「教員ポストで雇用された産学連携コーディネータ」という職業。研究者として産学連携現場を参与観察している面もある。

コーディネータとしての主な活動

● 京都大学

- 中小企業を中心とする約300件の持ち込み案件に対応。10%強で共同研究、有料コンサルを成約
- 事業系案件
 - 1) ビール、発泡酒の産学学共同開発
 - 2) 記録映画のDVDブック化



● 小樽商科大学

- 『北海道食品の輸出に向けた味覚の国際比較調査及び国際マーケティング調査』プレアワード、プロセスマネジメント
- 特定運営費交付金「開放型知的プラットフォームによる連携事業」採択
- 教員紹介ビデオ(1本3分強)を34本制作、順次WEB公開中



大学モデルの衝突と産学連携コンフリクト

大学側の大学モデル
＜産のシステム＞

＜学のシステム＞

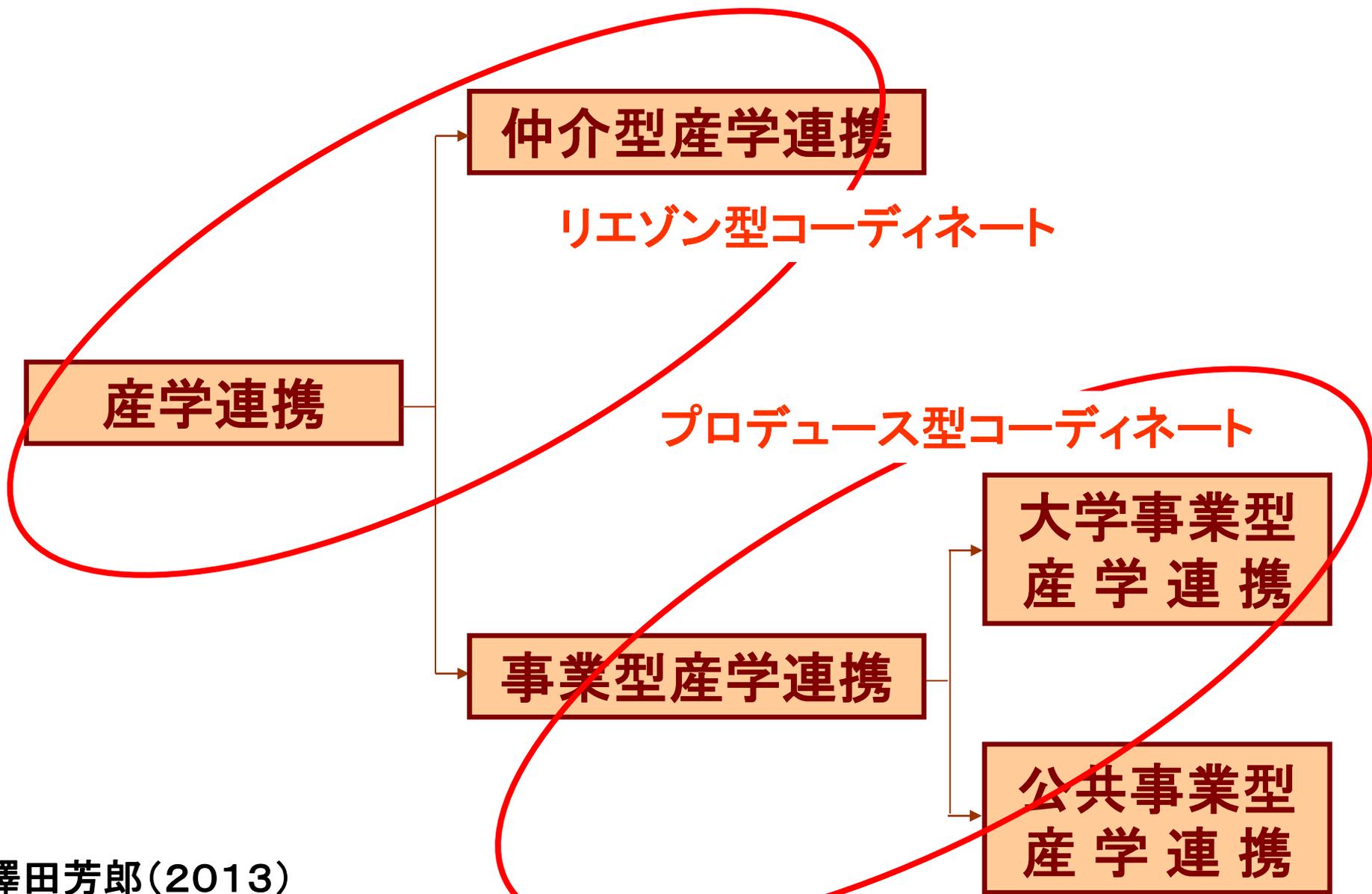
知財権者問題	研究管理型 産学連携
学術研究型 産学連携	品質管理問題

産業側の大学モデル
＜産のシステム＞

＜学のシステム＞

澤田芳郎(2004)「大学モデルと産学連携コンフリクト」
『産学連携学』1(1)

産学連携の分化とコーディネータ



澤田芳郎(2013)

第26回国立大学法人共同研究センター専任教員会議

「相互依存を伴う対立関係」の管理を

- 「科学の産業化」(ラベッツ、1971)、「科学の制度化」(廣重、1973)の中で、共同研究センター専任教員もURAも生まれてきた。「研究支援職」が制度化、深化してきたのではないか？
 - 学問の自由は研究者の特権ではないが、リソースにあかしてコントロールしていいものでもない。現場は「相互依存を伴う対立関係」にあり、精緻な管理が必要。一つの逃げ道は「研究者人格の多重化」。
 - 研究支援職は研究そのものではなく、研究の社会的意味やその発揮の手順の専門家。ゆえに「広報」や「事業化」に関しては状況をリードできる。よほど条件が整えば、「研究プロデュース」も可能か。

**トップダウンとボトムアップの融合による
新しい大学アドミニストレーションの
中核プロセスを構築するのはURA。
機能、活動上のコンフリクト、解決策の分析を。**

研究マネジメント学

～“支援”より“マネジメント”？～



岐阜大学 研究推進・社会連携機構
特任准教授・リサーチ・アドミニストレーター
馬場 大輔

「研究支援学」が可能か、
議論してみませんか？

はい！
面白いじゃないですか！

とはいったものの、、、

学問として誰がやるんだろう？

学問とする意味があるんだろうか？

実践、スキルがあってなんぼ

机上の理論より実利のある「学」がいいな

“研究”を“支援”する“学”と言われても、、、

URAの業務は、
研究について言えば、“支援”だけではない。
文字通り“支援”もするが、どちらかというところ、
全体のバランスをとって、調整することも重要

「研究“マネジメント”学」
の方が適当なのでは？

研究“支援”学

「支援 = サポート」

たとえば、

- ・ 提案書作成“支援”
- ・ 申請“支援”
- ・ 業務管理“支援”
- ・ 研究グループ形成“支援”
- ・ 国際連携“支援”
- ・ 企業マッチング“支援”
- ・ イベント開催“支援”・・・

“支援”は、主体に対するお手伝い、一助という印象

研究“マネジメント”学

「マネジメント＝管理・効果の最適化」

たとえば、

- ・ 研究グループ形成“マネジメント”
- ・ 海外機関調整“マネジメント”
- ・ 研究戦略“マネジメント”
- ・ 研究プロジェクト“マネジメント”
- ・ 研究環境“マネジメント”
- ・ 研究倫理・リスク“マネジメント”・・・

“マネジメント”は、一段階上の立場から主体を動かす印象

“支援”vs“マネジメント”

URA業務で比較してみると

業務	支援	マネジメント
提案書作成	添削、誘導、解説	コツ、ディレクション
公募情報	連絡調整、情報提供	戦略、方針、人事
申請	事務作業	再配、分担
研究グループ形成	連絡調整、情報提供	戦略、方針、人事
海外機関	連絡調整、情報提供	戦略、方針、人事
企業マッチング	連絡調整、情報提供	戦略、方針
プロジェクト管理	連絡調整、事務作業	戦略、方針、人事
イベント開催	連絡調整、事務作業	戦略、方針
研究倫理・リスク	事務作業	戦略、方針、管理

業務対象が同じであっても、
支援とマネジメントでは、**やることは異なる**のではないか？

URAとしてのミッションは？

URAを職種（＝給料をもらう）と考えたとき、

- ・ 教員のサポートに徹する
- ・ 教員の管理・効果の最適化を狙う
- ・ 大学のビジョンに従い教員を誘導する
- ・ ボトムアップ型で教員と一緒に大学を変えていく

など、大学によってURAの位置付けが異なる。

URAの裁量権は？

URAとして、

- ・ 教員のサポートに徹する
- ・ 教員にアドバイスする
- ・ 学長に意見できる
- ・ URA自身が独断（自己責任）

など、大学によってURAの裁量権**も**異なる。

いずれにせよ
URAという「仕事」と考えたとき、
給料をもらうためには、

何かしらの業績や目標の達成率で評価される。
つまり、URAとしての“仕事”をスキルアップしないといけない。

URAとしてのスキルアップは どうやって学ぶのか？

より効率的、効果的な支援方法や、運営手法など
経験や実績の豊富なURAから学ぶことはある。

たとえば、、、
多くの実績を持つカリスマURA Aは
よりよい手法やノウハウをマニュアル化し
「A手法」という実践手法を確立させた。

カリスマURAや「○○手法」を 分析、解析することは、 URAにとっての“学”なのか？

「A手法」に対して、同様に「B手法」が対極にある手法を提案しURA間で話題となってきた。
その手法を比較する研究者C氏と、
両手法を実践してみようとするURA D田氏がいる。

研究者C田氏のアウトプットは論文？提言？
URA D田氏は、“学んだ”のか“体で覚えた”のか？

C氏は、一生懸命机の上で分析・解析して
比較研究型「A-Bハイブリッド手法」を発表。

D氏は、毎日両手法を交互に実践して
実践淘汰型「A-Bハイブリッド手法」を発表。

どちらの手法が、 URAにとっての“学”なのか？

URAにとって、汎用的に“使える”手法なのか？

学問としての“机上の理論”になっていないか？

“誰か”が、“何とかして”活用できれば、
実“学”として意味がある、と言えるのか？

そもそも、研究者C氏の存在 = 新たな学問として
価値がある、とするのか？

私なら、URAとして“使える”手法はほしい！

では、誰が、誰のために 研究するのか？

カリスマURAは、
果たして“使える”手法を公開するだろうか？
(カリスマURAにライバルが増えるかも??)

実務者であるURAは、
ノウハウとして実践することはあっても、
“学”として“研究”するだろうか？
(自分のためでなく、仲間のためやるか?)

もしかして、URAが実践して成果が得られれば、
実学として十分に“学”なのかも？
(ライバル、受益者なんて考えなくていい?)

今、こうやって発表しているように
自分自身の日常業務のトライアルを、
“事例”として落とし込んで、比較、分析、解析することは可能。
仮説は立てることができるので、結論も得られる。

そういった数々のカリスマURAや「○○手法」など
任意で公開された情報について、
学会やシンポジウム、論文でディスカスする。

確かに、これは“学”かも？

改めて

研究“支援”学なのか

研究“マネジメント”学なのか

“支援”学

直接的、何をどう対応するか手法や技法 (WHAT)
technique, method

“マネジメント”学

間接的、どうやってそれを導くか理論や機構 (HOW)
process, mechanism

研究として“学”したい人によって、
“学”としての捉え方が異なるでしょうが、、

ただし、対象者（受益者？）は大きく異なる！

“支援”学

URAとしてtechniqueやmethodを突き詰め、
共有したい人が、**習得したい**人向けに。

パッシブURA向け？

“マネジメント”学

URAとしてprocessやmechanismを解明し、
提案したい人が、一緒に**考えたい**人向けに。

アクティブURA向け？

自ら“学”したい人は、
“支援”学、“マネジメント”学、どちらでもいい。
(アクティブURAなので。)

しかし、
パッシブな情報を仕入れた
「誰でもなれるURA」ではなく、
アクティブに自らの意思を持った
「人とは違うURA」であってほしい。

よって、これから学術研究として議論していくのであれば、

研究“支援”学ではなく、
研究“マネジメント”学！